パリ燃ゆ 6

大佛次郎

朝日新聞社

大佛次郎（おさらぎ　じろう）
本名、野尻清彦。1897（明治30）年横浜に生まれる。東大政治学科卒業後、外務省勤務などを経て文筆業に入る。戦前戦中戦後を通じ、時代小説、現代小説、ノンフィクション、戯曲、童話にいたる幅広い分野の名作を世に送り続けた。代表作としては『赤穂浪士』『霧笛』『帰郷』『パリ燃ゆ』などがある。ライフワークとも言うべき『天皇の世紀』を朝日新聞連載中の1973年、75年余の生涯を終えた。

パリ燃ゆ 6

昭和58年6月20日　第1刷発行　　定価400円

著　者　大佛次郎

発行者　初山有恒
印刷製本　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104　東京都中央区築地5-3-2
電話　03(545)0131（代表）
編集＝図書編集室　販売＝出版販売部
振替　東京0-1730

© MASAKO NOJIRI 1983 Printed in Japan
0193-260916-0042

パリ燃ゆ 6

大佛次郎

朝日新聞社

表紙・扉　伊藤鐵治

目次

第六部　焦土

終りの日々　9

ヴェルサイユ　72

裁く者　120

外部の人　145

ニュウカレドニア　175

亡命者　200

壕の中の手紙　222

あとがき（初版本より）　253

あとがき（ノンフィクション全集版より）　259

解説（大西巨人）　261

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

パリ燃ゆ 6

第六部　焦　土

終りの日々

1

ペエル・ラシェーズの墓地は、現在でもパリで一番大きな墓地で、小高い丘の南から西の斜面を占めている。市中の東側の地区に入っているが、コミューンの当時は、もっと場末町の中にあった。パリの墓地も大革命以前は市中の各所に在る寺に付属して散在したものだが、これを大体三カ所にまとめ、今日のモンマルトル、モンパルナッス、ペエル・ラシェーズに広く敷地を取って集めるようにした。ペエル・ラシェーズの名は、ルイ十四世の時代にイエズス会の僧院が置かれてモン・ルイと称され、国王の懺悔(ざんげ)僧だったラシェーズ長老が主宰して寺領地を拡張し、樹を植えて美しくしたので人が記憶した。市民はペエル・ラシェーズを土地の呼び名に使うように成った。イエズス会の教徒が追放に遭ってから、土地の持主は数代変って、最後にセーヌ県が買上げて墓地を経営することにした。ペエル・ラシェーズの名称は、その時もまだ通用したので、そのまま新しい墓地の名となった。有名な劇作者モリエール、ボーマルシェからラ・フォンテーヌなどの墓が市中の他の寺に在ったのもここに改葬して、墓地として地所も広く規模も大きいもの

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong

と成った。

最初は、パリの、第三、四、十、十一、十二、二十区の住民の死者を収容する企画で営まれたが、ラシェーズ教父の在世の頃に植えさせたマロニエや、菩提樹の並木道が繁って美しかった上に、丘の上に在って、パリ全市を西の郊外のサン・クルウやムウドンの丘まで、遠く見晴らす景勝の土地だったので、よその区に住む金持や名士たちが永代借地して墓を作るのが流行した。さかんに美しい墓がここに造られた。一八六三年のパリの地誌を見ると、詩人のアルフレッド・ミュッセの大理石の墓が胸像を飾り、詩を刻んであることも既に掲げられてある。詩は、「友よ、私が死んだら私の墓には柳をひともと植えてくれたまえ」で始まる有名なもので、その言葉に従って植えた柳の木も、この地誌を書いた時には、もう枯れていたと記事に出ている。ミュッセが死んだのは、一八五七年であった。

パリ・コミューンの時の市民が各地区のバリケエドを守って闘って政府軍の砲火に迫われ、次第に包囲を圧縮されて、ベルヴィル、メニルモンタンの無産者街一帯に残るだけになった時、ショーモンの丘と、このペエル・ラシェーズが抵抗の拠点となり後者では大きな墓石が身を守るトーチカの役をした。ここの墓は、田舎の村に在るのと違って、石の寝棺の形をしたものから、龕(がん)のように屋根のあるもの、高く生前の姿の胸像や浮彫りを掲げてあるものなど、堅固な石材に結構を尽したものなので、繁った樹木とともに屈強の陣地となり得る。その上に、墓地は鉄の扉をつけた石門と、往来に沿って長大な石の塀で囲まれていた。地域内のパリの市街を俯瞰する高い地点には味方の大砲を据えて陣地となっていたことで、市街戦で敗れ、政府軍の攻撃に迫われた

者たちが、逃げ込んで集ったのも自然である。

現在でも、この墓地のマロニエの大樹の並木は森々として美しい。花時になると、敷石道から付近の墓の上に、紅と白との、こまかい花が散り敷き、ミュッセの墓には、その後、いつ時分新たに植えたものか、細長い柳の木が立って微風に枝を戦がせている。

白兵戦の最も激しかったのは、斜面の中ほどに当るバルザックの墓の付近と伝えられているが、バルザックの胸像はその血みどろの決戦を見て立会った時のまま、小径の脇に在る。そして弾薬も抵抗の力も尽きて降服した市民の男女が容赦なく整列させられ銃殺された時、背中をつけて立った「壁」は、蔦がからみ、「コミューンの死者の為に」と文字を刻んだ石をはめて、ペエル・ラシェーズの墓地の東南の隅に保存されている。付近は刑の執行の前から壕を掘ってその人々をやたらに投げ込んだ共同の墓、コミューンの指揮者だった人々の墓が並び、道路一筋を越えると、ナチ・ドイツの占領軍に対するレジスタンスに倒れたコンミュニストの新しい墓が沢山居並んで、彼らの先達だった人々と、向い合って壁を仰いでいる。カール・マルクスの娘ロオラと婿のラファルグ、詩人のボオル・エリュアールの墓もここに並んでいる。一株の古い大きな樹が間に枝をひろげている。壁の処刑を見まもっていたものだろうし、その辺の土に流された血を根から吸って育ったものであろう。塀の外は、すぐ町の人家である。壁の色から新開地だと判るような現代の建物である。

この壁の前で、一体、どれだけの人数の市民が銃火の犠牲になったのか？　生き残った人間は全部連れて行って、取調べる手続きも採らず殺したので、人数を算える手間もかけなかった。抵

抗したかどうかも問わない。墓地の外で捕えた市民までもやがて、ここに曳いて来て、片付けた。

ペエル・ラシェーズの戦闘がまったく終ったのが五月二十七日の夜で、二十八日には残った街のバリケエドの抵抗も終ったのだが、その後、数日間にわたって墓地の中で処刑の銃声が起るのが聞えたと言われた。

2

「タルタラン」や「サフォ」「アルルの女」の作家アルフォンス・ドーデェが、戦争やプロシア軍の包囲中のパリに取材した短篇を幾つか書いた。一八七一年から七三年の間にパリの新聞に掲載した小品で、ドーデェは妻を南仏のニースに避難させてあったが籠城中のパリに残り第四区から国民兵として第九十六大隊に服務し現在のヴォジュ広場に置かれた軍事教練の学校で教官となり、ドイツ軍の包囲を突破する作戦に政府が出撃するのを待機していた。新聞に関係があったのでロシュフォール、ドレクリュウズ、フルーランスなどとも相識っていた。ドーデェが従軍したのは、シャンピニイに出撃した際のことで、その場合も補充兵で後方のドルメニ街のバラックに留まり、後に市民に銃殺されたクレマン・トマ将軍が望遠鏡をあてて前方を見ながら馬を進めるのを路上で見かけたり、「第八中隊の演奏会」の如き自身の実歴を書いた小品を残している。（「月曜物語」）

ヴェルサイユ政府の軍隊がパリに攻め入って、コミューンの掃蕩撃滅を強行した血みどろの週

間には、ドーデェは家族の疎開先の田舎に行っていてパリの市中に居なかった。「月曜物語」の中に、「ペエル・ラシェーズの戦い」と題した小品があるのは、パリに帰った後に、人から聞いた話を書いたものであろう。この作品はペエル・ラシェーズ墓地に於けるコミューンの市民の最後の抵抗を、聞き書きにしろ、かなり軽く低く扱って書いている。ドーデェはパリに出て若い日に皇弟モルニー公爵の秘書を勤めた時代もあり、「良い時代」のパリを知り、また暗い事柄を忌嫌う性格からも、コミューンにあまり同情がなかったことは察せられる。

「ペエル・ラシェーズの戦い」は、次のようなもので、

「番人は笑い出した。

『ここで戦いがあった？　そんなものは、決してありませんでしたよ。新聞の作りごとなので。』」

と書くことから始る。番人とはペエル・ラシェーズ墓地の番をしている人間の一人だから、その場にいて見た者の話となっている。

「『極く簡単にいきさつを話しますと、二十二日の晩、あれは日曜日でしたが、約三十名ほどの砲兵隊が七サンチ砲と新式の霰弾砲を運んで来たのを私たちは見ました。彼らは墓地の一番高いところに陣取りましたが、ちょっと私がそこを見張っていたので、出て見ますと、霰弾砲は私の番小屋の近くの、この道端に、大砲は少し低い台地に置きました。彼らは着くなり、礼拝所（屋

根つきの墓）を幾つか私にあけさせました。奴らが手当り次第に物を毀して、あるものをありったけ掠奪するものと私は信じました。すると、隊長がみんなの中に立って短く演説して、〈何かに手をつける奴があったら、びんたをくれるぞ……。一同、分れ。〉と言うのでした。白毛頭の老人で、クリミヤ戦役とイタリアの戦争の勲章をつけていて気難かしそうな隊長さんでした。その命令をよく守って、墓から何も盗まなかったんですから、部下もほめてやることです。モルニー公爵の十字架一つでも二千フラン近い値打ちのものでしたが、手をつけなかったんですからね。

が、このコミューンの砲兵たちは、いやな連中の集ったものでした。三フラン五十の手当で酒を飲むことばかり考えている急仕立ての砲手なので……連中が入って来てから墓場がまったく賑やかになって了ったもので。モルニー公爵やファヴロルの墓所に入って寝たんですよ。ファヴロルのは皇帝のお乳母さんの墓ですから立派なものだったんです。シャンボーの墓地の泉水で葡萄酒を冷やしてさ。それから女を呼込みました。一晩中、飲みあかすので、まったくの乱痴気騒ぎ、死んだ人たちもあの馬鹿騒ぎを聞いたでしょうね。

それはとにかく、悪党どもは何も出来ない癖に、ずいぶんパリに悪いことをしましたよ。奴らは絶好の場所にいて、時々、命令が来る。

〈ルーヴルを撃て。パレエ・ロワイヤルを撃て。〉

すると、隊長の爺さんが大砲の狙いを定め、弾の奴が町の空をまっしぐらに飛んで行くのです。丘の下に何が起ってるのか、私たちにはよく判らない。その内、銃の音が近くなって来ました。コミューンの奴らは別に気にもかけません。ショーモン、モンマルトル、ペエル・ラシェーズで

のせり合いから考えて、ヴェルサイユ軍が進んで来るだろうとはまだ考えない。この妄想を打破ったのは、官軍の水兵がモンマルトルの丘を占領して、私たちの方に最初の弾丸が飛んで来たことです。

まったく考えもしてない。

私も彼らの中に入って、モルニーの墓によりかかって、パイプをふかしていたところなので、弾の飛んで来る音を聞いて、地面にひれ伏す間もなかったくらいでした。最初の間は、これは撃ちそこないか、酔っぱらった味方がしたことだと思っていました。これがとんでもない。五分も経つと、モンマルトルがまた光って、別の弾丸が最初のと同じように景気よく飛込んで来たので、奴らは大砲も霰弾砲もそこに置いたまま、一散に逃げてしまったんです。墓場は安心の出来るほど広くないので、奴らはどなりました。

〈裏切りだ。裏切りだぞ。〉

爺さんだけが、ただひとり弾の来るところに踏みとどまって、部下の砲手が彼を置去りにしたのを泣きわめいて、砲台の真中で悪魔のように暴れまわりました。

夕方が日当を払う時間です。幾たりか彼のところに帰って来ました。旦那、私の番小屋を見てください。その晩、金を貰いに来た奴の名前がまだ残っています。爺さんが名前を点呼して順に書いて行ったのです。

〈シデーヌ、居ります、か。シュディラ、いる。ビヨ、ヴォロン……〉

御覧のとおり、奴らは四、五人出て来ただけで、それも女を連れて来ている。まったく私もこ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertong